

【特集】救急医療が危ない！

緊急対談

# 救急医療体制の現状とその課題

救急医療体制を取り巻く現状は、医療従事者や救急隊員らの努力に支えられているものの、いつ崩壊するか分からない問題を抱えています。救急医療体制を守るため、救急医療の正しい利用が求められています。【問い合わせ先】健康増進課（☎ 71-1814）



## ◎救急医療とは ～救急医療の種類～

【河合部長】

今日お集まりのみなさんには、救急医療体制の現状と課題、そして今後に向けた救急医療をテーマに対談をお願いしたいと思います。私からは導入ということで、救急医療の種類について説明します。まず、一次救急は、入院の必要が無く、外来診療のみで対応できる帰宅可能な患者への対応ということになっています。本市では、休日応急医を医師会で実施していただいているほか、山陽小野田市急患診療所があります。次に二次救急です。入院して治療が必要な中等症、重症患者の救急対応です。そして、三次救急というのがあります。これは、ICU等で加療する必要がある重篤な患者に対するもので、山口大学医学部附属病院で行っています。



## ◎平日夜間や休日に病気になったら ～急患診療所・休日応急医～

【河合部長】

まず、長澤副会長から急患診療所について、ご説明いただきます。

【長澤副会長】

山陽小野田市急患診療所は、それまでの休日小児科に加え平成22年1月から夜間診療を始めており、夜間は、月曜日から金曜日の19時から22時30分まで診療しています。現在は、当番制で22人の医師に出務していただいています。一次救急というか0.5次救急ですが、ちょっとしたことで医師に診てもらうことで安心して帰ってもらって、その日は何とか治

まるといった感じで行っています。8割から9割方は、その日に急患診療所で治療が終わる状況で、山口労災病院、山陽小野田市民病院などを紹介するような患者は、1割あるかないかぐらいです。医師会としては、開業医に協力していただき、少しでも地域医療に貢献できるように一生懸命やっています。

【河合部長】

急患診療所が夜間診療を始めて、約5年半となりますが、特に記憶に残っている事例はありますか？

【長澤副会長】

いろいろありますが、一つは50歳代後半の女性が急患診療所に具合が悪いと来て、そのときの担当医師が、何か様子がおかしいと思い、宇部興産中央病院を紹介されました。すると、くも膜下出血の初期と診断され、すぐに手術の処置をほどこされ一命を取り留めました。もう一つは、咽頭が腫れて急激な口蓋炎があった患者だったのですが、その時、山口労災病院にたまたま山口大学医学部附属病院の耳鼻科の医師がいましたので、診断の結果、山口労災病院の耳鼻科に紹介しました。山口労災病院で診たところ、これはだめだとすぐに山口大学医学部附属病院に紹介して、搬送され、救命されるという、そういった例もありました。

【河合部長】

急患診療所以外でも、医師会で休日応急医をしていただいています。そちらの紹介もお願いします。

【長澤副会長】

日曜日、祝日、年末年始等の当番医で昭和の時代から続いている休日応急医制度です。小野田の場合は外科系と内科系それぞれ1医療機関ずつ、山陽の方は医療機関が少ないということで、外科系と内科系の区別なしで1医療機関、眼科も耳鼻科も休日応急医をやるということで開いています。